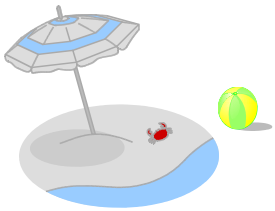

説教要旨「一緒に生きる人々」

使徒言行録２章４３～４７節

使徒言行録が記す最初の教会の姿は、「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った」（44・45 節）というものでした。それは、親切心や善意といったものに基づくものではなくて、聖霊によってひき起こされた外的な変化です。賜物として聖霊を受けた彼らは、自分のことを優先していくような自分の殻をそれぞれに打ち破られて、他の人へと思いを向け、隣人に仕える者へと変えられたのです。

イエス様が十字架にかかられる直前にあってもなお、誰が一番偉いかということにしか関心のなかった弟子たちが、今は他の人へと思いを向けて、そのために自分を献げていく生き方へと変えられました。これまで第一としてきたものが、根本から変えられていき、心から主に仕え、隣人に仕えるように変えられていく、そこに確かに聖霊が生きて働いているのです。

彼らの心と思いとが「一つ」とされて、おのおのの持ち物を互いに「分かち合う」ようになったことこそ、聖霊の業であり、聖霊に満たされたことの証拠でした。それは、自己中心な生き方から隣人に仕える生き方への転換です。そして、それが最初の教会の姿でした。

わたしたちは「キリストの体なる教会」という「一つの体の部分」であり、その共同体の一員です。「命のパン」であるキリストを中心として、その「一つのパン」を分かち合うことで成り立つわたしたちは、そのように「キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分」です（ローマ 12:5）。まるで「唯我独尊」とばかり、自分一人がこの世に存在し、世界は自分を中心にして回るべきだと考えるこの世の生き方とは正反対に、自分がこの世なり家庭なり教会なりといった共同体の一員であり、その交わりと支えの中で自分が生かされていることをわきまえて歩むのです。そうして互いが互いに仕え合って支えていく中で、自分自身も活かされていくようになる、それがキリストに結び合わされた者たちの生き方なのではないでしょうか。

持つものが持たざるものを侮り、蔑む、そんなすさんだ世の中に絶望しそうにもなります。しかし、わたしたちは、イエス・キリストによって一つに結び合わされた喜びの交わりに生かされている、この恵に感謝しつつ歩んで参りましょう。

（２０２１・７・１１　説教者：稲垣真実）